

## 第三二回 武蔵野文学賞「高校生部門」 小説部門

選考委員…三田 誠広、宮川 健郎、町田 康、楊 逸、土屋 忍

### ■小説部門 全体講評（土屋 忍）

今回も力作が多数寄せられた。入念な選考を経て、5 作品が一次選考を通過して二次選考に進んだ。選考委員全員が 5 作品を精読した結果、もつとも多くの評価を得たのが「闇闇と走光性」であった。委員の投票によって獲得した総点は圧倒的であり、満場一致で、最優秀作に決定した。

その他の作品の評点は、「連綿と赤」「仙女の舞」「仮面人形」「Sketch」と続いた。なお、結果的に順位が低くても、その作品を高く評価した委員がいることを明記しておきたい（だから最終選考に残っているのだ）。他方で、順位が高くても、全員が手放して賞賛しているわけではない。歴代の芥川龍之介賞の選評をみても、おしなべてバラツキがある。然るべき文学賞であれば、どこの文学賞でも同様であろう。

ここにあげた選評は、いずれもそれぞれの委員のスタイルにしたがって書かれている。揃えたりまとめたりしないほうがくみ取れることもより多くなると考え、そのまま掲載することにした。惜しくも受賞に至らなかった応募者も、公開された選評を噛みしめたり唾棄したり一喜一憂したりしてもらえたら幸いである。またこのページをみた高校生で、自作で選考委員の鼻を明かしてやろうと思った人がいたら、ぜひ次回の応募を考えてほしい。

小説から始まったこの武蔵野文学賞高校生部門も、今年で 13 年目を迎えた。ますますの充実と発展を期したい所存である。

川崎友菜さん、このたびはまことにおめでとうございました。

■三田 誠広

【最優秀作】

「暗闇と走光性」 川崎 友菜

虫についてのそれなりに深い考察があつて、その考察が述べられるセリフは理屈っぽいのですが、話している二人の少女に存在感があり、彼女たちが切実な生きづらさをかかえていることが伝わってきます。書き手はそれを地の文で解説するのではなく、いきいきとしたセリフのやりとりで展開しています。候補作のなかで最も小説らしい展開力をもっていると感じました。

【候補作】

「仮面人形」 加藤 愛梨

青春期にありがちな自意識を描いていて、よく書けているところもあるのですが、理屈が過剰で具体的な展開が乏しく、小説としては観念的すぎるものになっています。もっと具体的に話を作っていかないと、小説らしい展開にはならないでしょう。大宰治の「人間失格」のような自意識を描いた先行作品を参考にして、そこを乗り越えていくくらいの気概がないと、この種の作品は難しいと思われれます。

「連綿と赤」 鈴木 りりこ

理屈っぽい説明が多く小説としては生硬に感じられるのですが、文体に強度があり、ヒロインが置かれている鬱屈した状況が正確に伝わってきます。状況説明に徹しているだけで、何事も起こらない日常を描いた作品なのですが、それまで交流のなかった弟との会話が提示されるラストシーンに温かみがあり、希望がほの見える感じになっていて、好感をもちました。

「Sketch」 谷内 淳

文章が安定していてその点は評価できます。ただそれぞれの作品があまりに短く、登場人物のキャラクターが類型的で、おもしろみに欠けていますし、それぞれの断片をショートシユートとしてとらえても、ひねりがなく、意外性がありません。山場もオチもなく文字どおりスケッチに徹していて、試みとしては評価できるのですが、小説の楽しさという点では中途半端なものになっています。

「仙女の舞」 丸田 瑞希

母への語りかけという一人称の作品で、分析的に状況を見つめている点と、過剰に感傷的になっていない点は高く評価できます。しかし小説としては世界が閉じていて、イメージがうすいと感じました。書かれている状況の重みは確かに伝わってくるのですが、小説としての完成度に疑問を覚えました。

■宮川 健郎

【最優秀作】

「暗闇と走光性」 川崎 友菜

全体は「私」（村主）の語りだが、虫が好きな友だち（長谷川）との対話によって展開していくから、開かれた物語になっている。「私」が片目を失明した自分自身をうまく見つめられないことと、ほんとうは嫌いな虫のことが重ねられていて、わかりやすいが、同時に、作品の構図が単純で物足りない気もする。

【候補作】

「仮面人形」 加藤 愛梨

語る内容を「人形劇」と相対化しているから、案外風通しのよい文章になっているけれど

も、いつも笑顔の仮面をかぶっている「僕」を描くということに、あまり新しさを感じられなかった。

「連綿と赤」 鈴木 りりこ

漢語の多い生硬な文章には魅力もあるが、日常的なことを大きめに書いているような印象も受ける。「私」と母親、父親、弟の関係の捉えかたが「私」の主観的にすぎて、うまく物語に入り込めない。おしまいの弟とのシーンは、ただ物語を終わらせる仕掛けに終わっているように思う。

「Sketch」 谷内 淳

春夏秋冬、時代も異なる四つの物語のオムニバスである（四つめは未来の物語）。情景、状況を描き出すことばが的確で、それぞれ、あざやかな物語になっている。絵を描くというモチーフが四つをつないではいるが、全体としては未完成な感じが残る。それでも、さまざまな工夫があることを買いたい。

「仙女の舞」 丸田 瑞希

改行が少なく、センテンスが長いスタイルで連綿と語られていくことによって、「私」の自殺をはかった母親（貴方）の記憶、母親（貴方）への思いが重層的なものになっていく。作品そのものに存在感があって、一人称のモノログ小説のなかでは、もっともすぐれていると思う。

■町田 康

【最優秀作】

「暗闇と走光性」 川崎 友菜

人はなぜ人を求めるのか。理解され愛されたいと望むのか、ということを上辺の美しい言葉ではなく、人が忌むものの実質・実体の中に見出し、それを小説として描いた、真に美しい作品。人の醜い部分から目を背けず、凝視し、それにより逆説的な希望に辿り着く。巷に溢れる空疎な綺麗事を打ち砕く力がこの作品にあった。

【候補作】

「仮面人形」 加藤 愛梨

世間に馴染めない者が真の自分を偽るうち自己を見失う物語。

よく見る話だが、土俗的民話的アプローチ（「肉付き面」など）と心理学的アプローチ（所謂ペルソナ論）と精神医学的アプローチ（人格障害としての理解）が混ざっているように思える。

三つの虚構の段階がある。上に行くほど現実に近い。とある病院。

劇場。口上を述べてるレベル

舞台上

進み方は、劇場↓舞台上↓劇場↓とある病院。

僕と「僕」の違いが詳細に語られるのに比して、この世界と「この世界」の違いがあまり語られないため、物語が奥行きを欠く。

語りの文章には粘りがあり、説得力がある。

「僕」の葛藤が当たり前の前提としてあるため、読者は「僕」にも僕にも共感せず、同情もしない。よって物語に没入しない。

「僕」と、この世界、の懸隔、「この世界」の絢爛をもっと描くべきであろう。

### 「連綿と赤」 鈴木りりこ

文章が正確で言葉遣いも正しい（不倫と書かないなど）。他者の描き方が丁寧で正確。自分中心の描き方をしておらず、距離がしっかりと作られている。

その一方で、両親の不和やその原因となる父の濫費、母への疑念、などは曖昧で具体性を欠く筋の動かし方があまりうまくない。

血と愛情という主題も、うわすべりで、小説を書くための「設定」に留まっているように思える。

### 「Sketch」 谷内淳

そもそもスケッチする文章力が低い。春夏秋冬四季の流れが内容と絡んでいない。夫々の話の中に孕むもの、別離や不如意、がすべて似通っているため、この形による効果が得られていない。別離や不如意、といった意味を負わされない、秋の孤児はよかった。迫力があつた。

### 「仙女の舞」 丸田 瑞希

一文が長く、修飾を重ねるうちに主語が行方不明になる傾向がある。二人称で、語りかける手紙文のような形は内容によく合致している。

仮面の下の私、と、貴方Ⅱ母親、がそれぞれに苦しい立ち場にあることが次第に明かされる形で描かれているが、その二つがよく混ざり合っていない。互いの影響をおよぼす様子が描かれず、別個にある。

具体的に描かれる部分が少なく、筋の動きも少なく、ただただ心情が吐露されるばかりなので、それに同情することが前提の、甘えた書き方になっている。

死んで新しい人生が始まる、というところは説得力を欠く。その新しい人生がいったい誰の人生なのか描かれないからであろう。

## ■楊逸

### 【最優秀作】

「暗闇と走光性」 川崎 友菜

孤独を抱える女子中学生二人、「私(村主)——右目眼帯という生理的原因で孤立」と「長谷川(推し系文化に馴染めない原因で孤立)」は虫観察を通して友情を築いていく。「自然を遮断してコンクリートの上で生活する」今時の彼女たちの、虫に向ける目線、そして虫に自己投影することで、己と向き合い、「人間」とは「生きること」とはについて徐々に切り込んでいき、読む者にもさまざまと考えさせる。

後半は、やや理屈っぽく、「長谷川視点」の語りが挿し込まれたなど蛇足に感じる部分もあったが、作品に影響するほどのものになっていないとして、評価したい。

### 【候補作】

「仮面人形」 加藤 愛梨

生まれつき「感情(表情も)欠如」という「僕」。家族にも学校の友達にも愛されるために「笑顔の仮面」を作る。学校では「おバカさん」を演じて「賢い」という真の自分を隠し、家では「朝寝坊のふり」をしたり「嫌いな肉料理を頬張ったり」「本当は野菜が好きなのに嫌いふりをする」。案の定、そうしているとどんどん辛くなり、ついに精神に來たして、薬漬けになり自傷行為に走ってしまう、、、

自我を掘り下げて書くならば、深みのある「中身」が不可欠だ。おばかさんのふざけだの

寝坊だの食の好き嫌いだのばかり書き並べるようじゃ、過剰な「自意識」だけが浮いてしま  
うではないか。

### 「連綿と赤」 鈴木りりこ

初潮を迎え、胸も膨んできた「私」。無理解で不仲の両親と住む家はインコのケージみた  
いで窮屈に感じ、また母の不貞も疑うようになって、「赤」や「血筋」についてついに重く  
考えてしまう。「血の繋がり」に固執するほど「無精卵」の純潔を憧れる。

母親像は類型的な印象も受けるが、結末「コンポタージュ」の暖かさに暗示される「姉弟  
情」は、テーマの昇華に繋げてくれたおかげで、全体がまとまり、画龍点睛の効果があつた。

### 「Sketch」 谷内淳

スケッチを共通のワードに書かれた4編。独立の作品であれば、各々に「題」が必要なので  
は？ またショートショートという体裁で書く物語は、幅がない分、厚みや巧みな構造が求  
められる。掘り下げするのも波を起こすのもしないつもりなら、結末に何か工夫してほしか  
った。

「叶わぬ恋」「進学の道」「挫折」「未来世界とアナログ」、——どれも発展性のあるアイ  
デアで、時間をかけてじっくり熟成すればきっと物語構築するための良い素材になるだ  
ろう。

### 「仙女の舞」 丸田 瑞希

「あなた（母親）」自殺の連絡を受けて、「私」もついに「死」を決める。死ぬ前に「あな  
たとの思い出」を点検するかのようには、断片的なエピソードを綴って小説にする。「人格分  
裂（育児放棄と暴力の一方時々優しさも覗かせる）」という「あなた」に育てられた「私」  
はやはり精神が病んで自傷行為を繰り返すようになる。「もがき」を書きたかっただろうか。

「あなた」の二重人格に執着するあまり、迷走してしまったようだ。

テーマの絞り込み、エピソードの取捨、饒舌文体の改善などを意識して一度書き直した方が良いかもしれない。